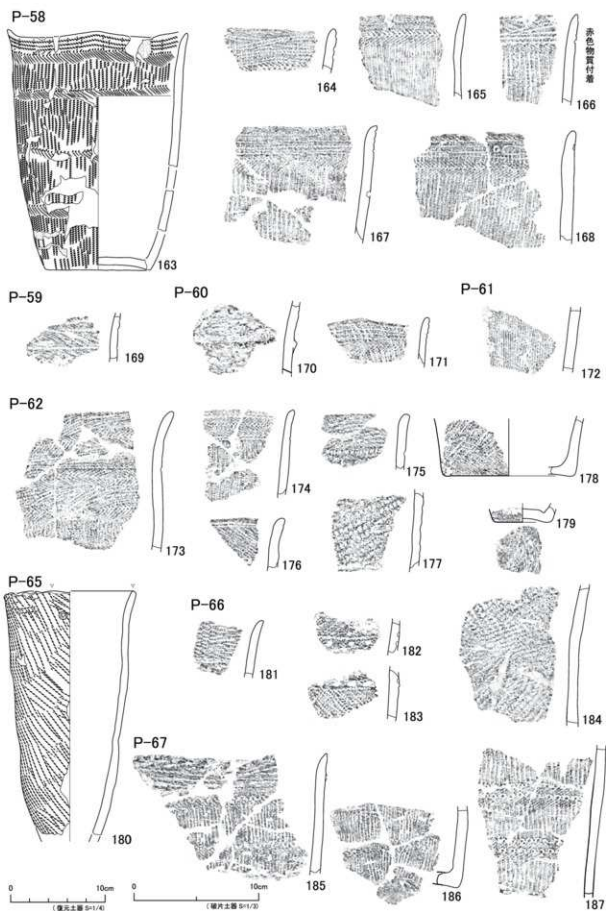
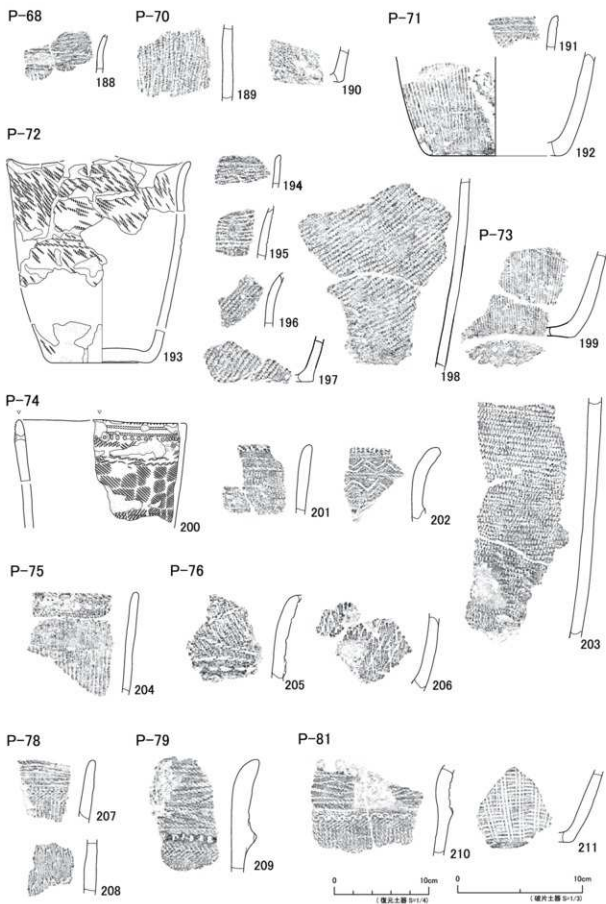


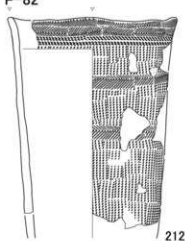


図V-19 土坑出土の土器(10)

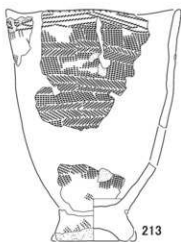


図V-20 土坑出土の土器 (11)

P-82



212



213



214

P-83

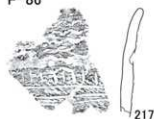


215



216

P-86



217



218



219

P-87

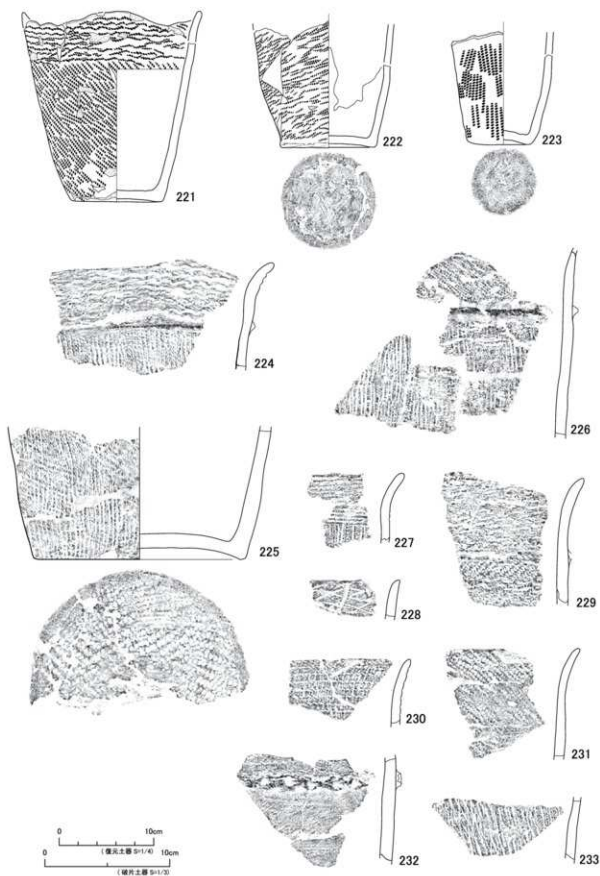


220



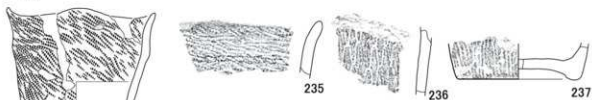
図V-21 土坑出土の土器 (12)

P-88

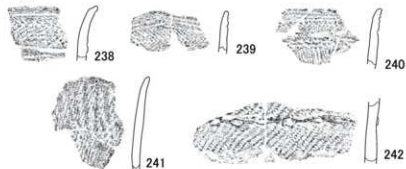


図V-22 土坑出土の土器 (13)

P-89



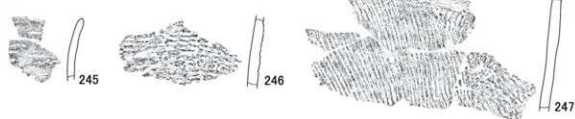
P-91



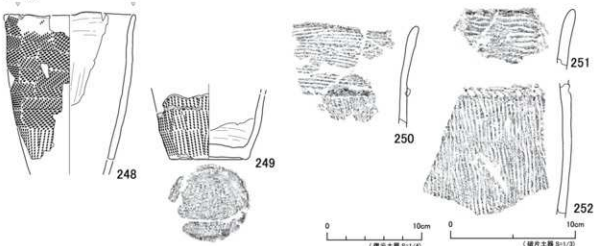
P-93



P-94



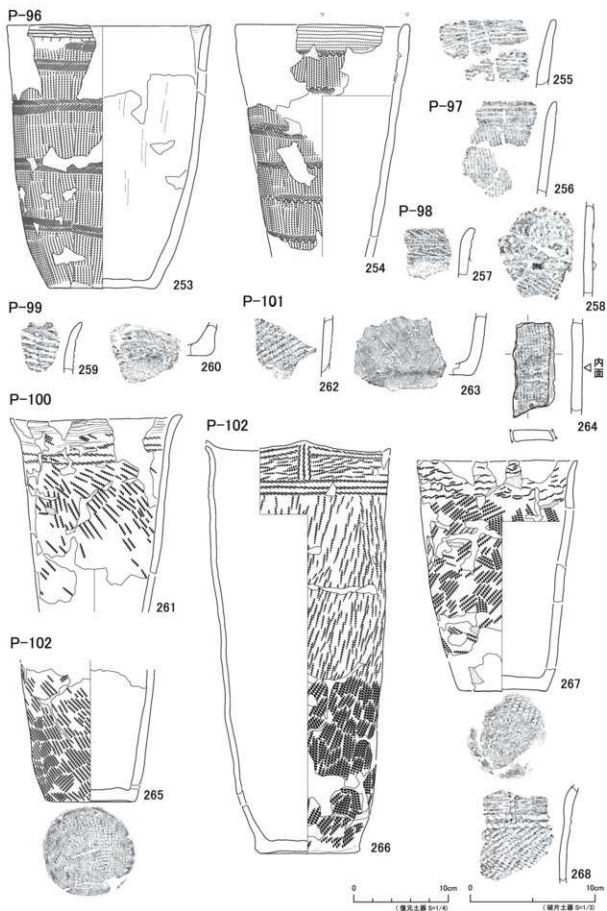
P-95



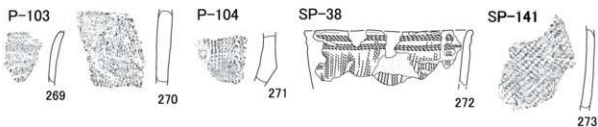
0 10cm
(復元土器 5:1/4)

0 10cm
(復元土器 5:1/4)

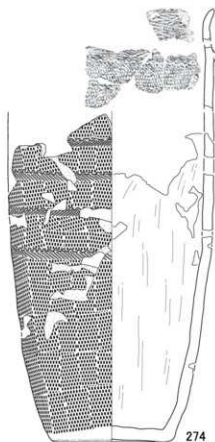
図V-23 土坑出土の土器 (14)



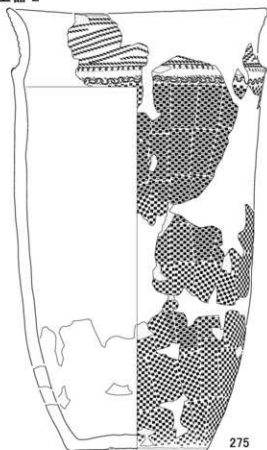
図V-24 土坑出土の土器 (15)



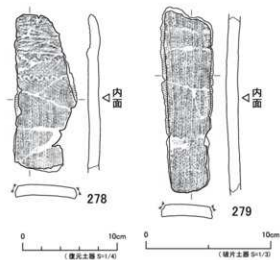
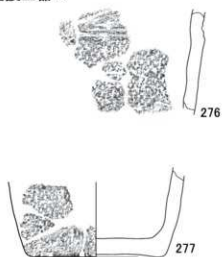
埋設土器 1



埋設土器 2

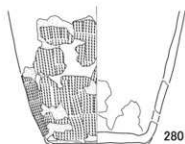


埋設土器 3



図V-25 土坑出土の土器(16)・SP・埋設土器(1)

埋設土器 4



280

埋設土器 5



281



埋設土器 6



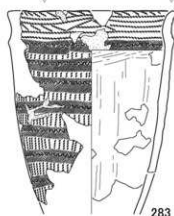
282



図 V-26 埋設土器 (2)

MB

MBPO-2



283

MBPO-3



284

MBPO-5



286

MBPO-6



287

MBPO-9



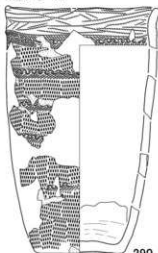
288

MBPO-10



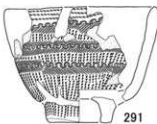
289

MBPO-11



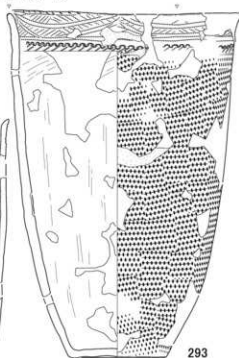
290

MBPO-14



291

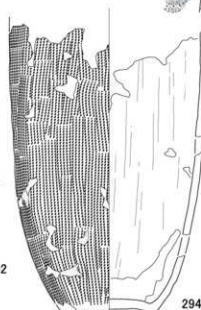
MBPO-13



293



292



294



図V-27 盛土遺構出土の土器(1)MB

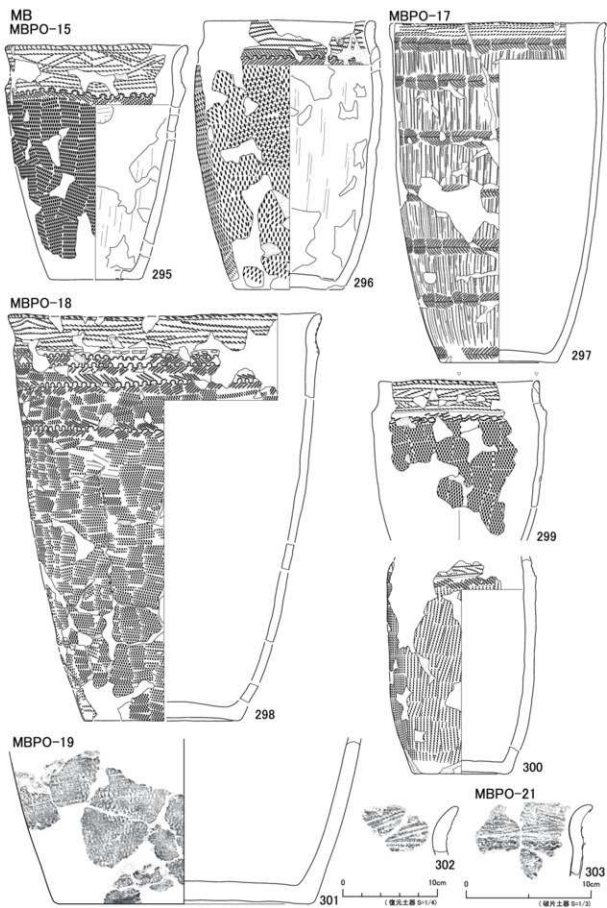
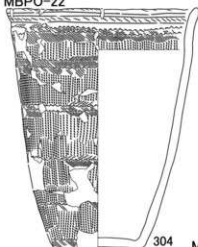
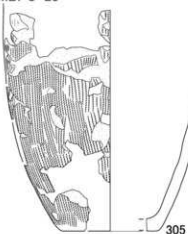


図 V-28 盛土遺構出土の土器 (2)MB

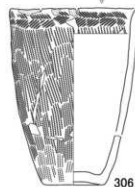
MB
MBPO-22



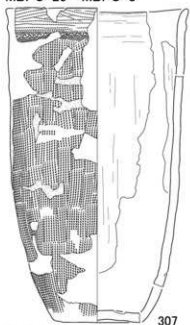
MBPO-23



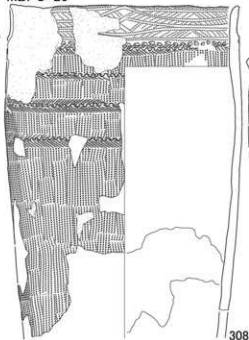
MBPO-24



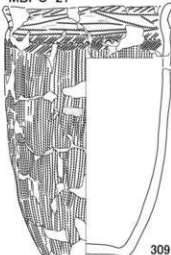
MBPO-25・MBPO-8



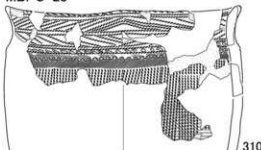
MBPO-26



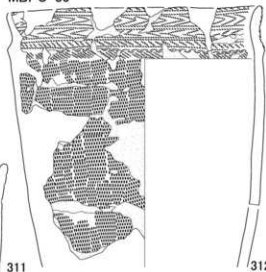
MBPO-27



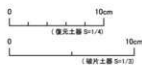
MBPO-28



MBPO-30



MBPO-29

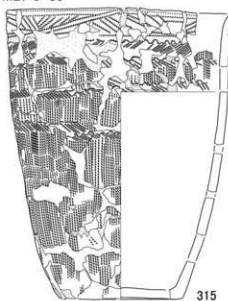


図V-29 盛土遺構出土の土器(3)MB

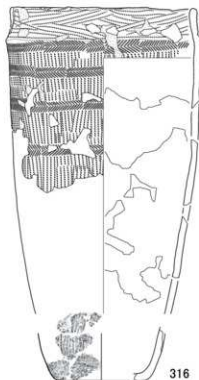
MB
MBPO-32



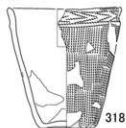
MBPO-33



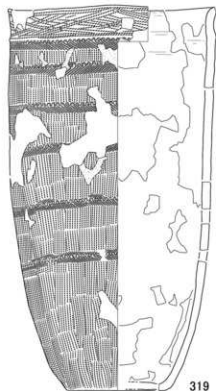
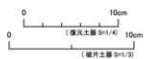
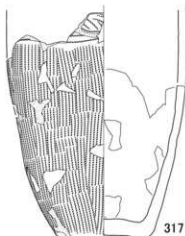
MBPO-34



MBPO-38



MBPO-35

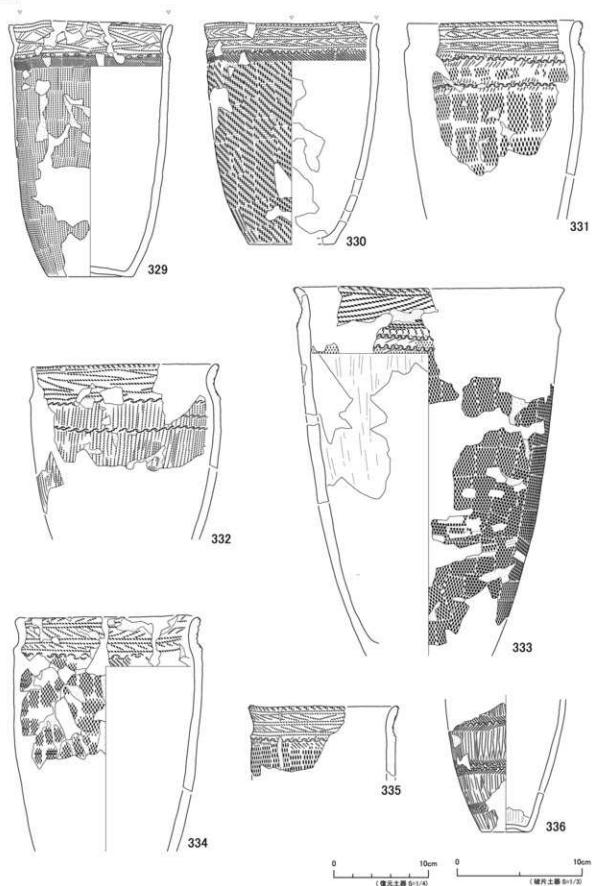


図V-30 盛土遺構出土の土器(4)MB



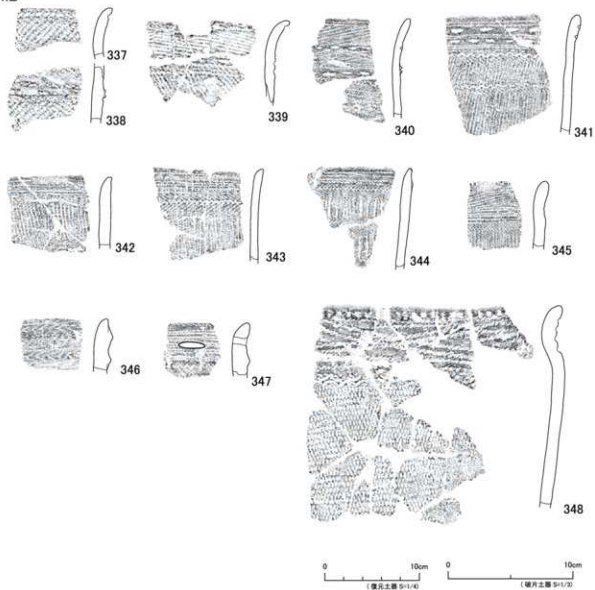
図V-31 盛土遺構出土の土器 (5)MB

MB



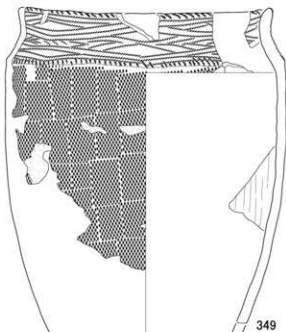
図V-32 盛土遺構出土の土器(6)MB

MB

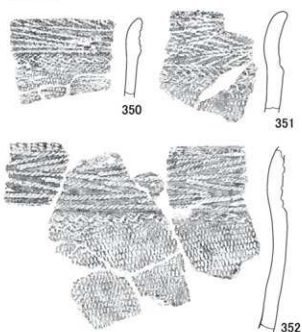


図V-33 盛土遺構出土の土器 (7)MB

MC MCPO-1



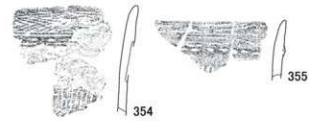
MCPO-2



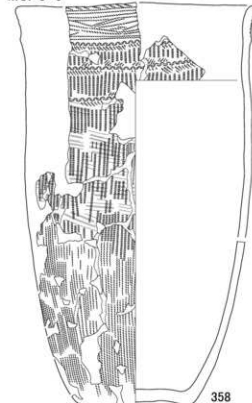
MCPO-3



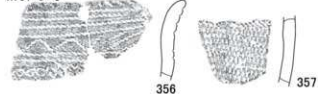
MCPO-4



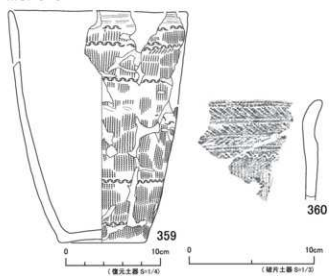
MCPO-6



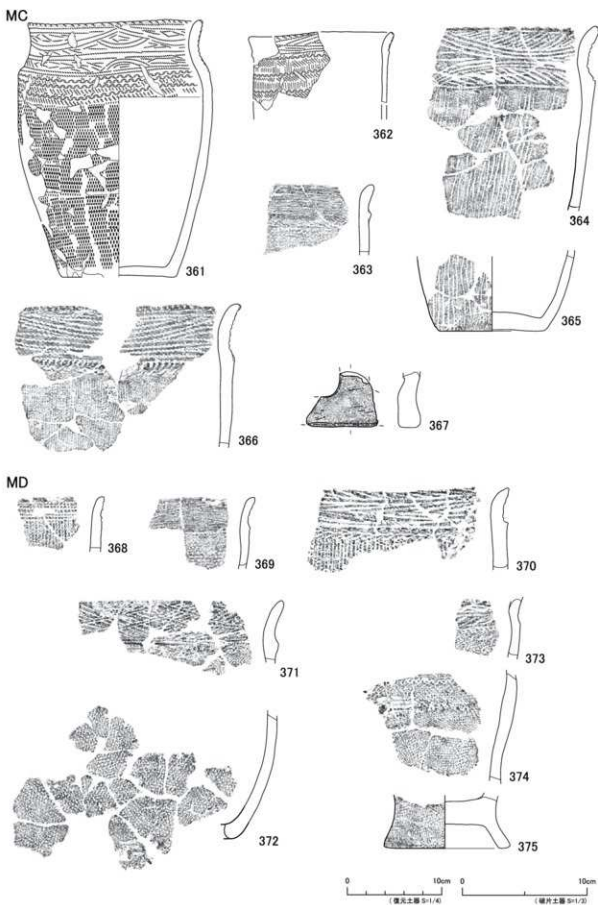
MCPO-5



MCPO-6

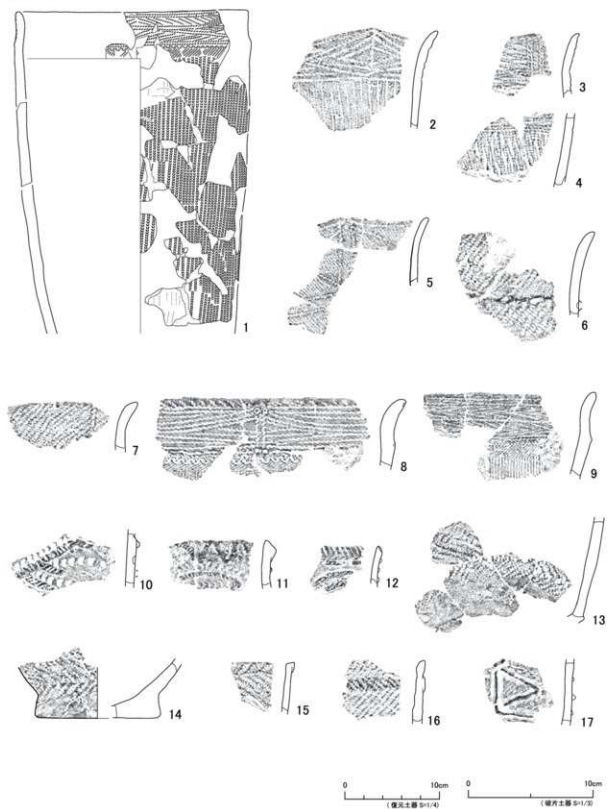


図V-34 盛土遺構出土の土器(8)MC



図V-35 盛土遺構出土の土器 (9)MC・MD

包含層



図V-36 包含層出土の土器

3. 石器等

(1) 遺構出土の石器等 (図V-37~91-1~435 表V-7・8)

剥片石器は、ほとんどが頁岩製で、石材の記載がないものは頁岩製である。

竪穴住居跡(H) 出土 (図V-37~41-1~51)

1~3はH-2 覆土出土である。1はスクレイパーで、左側縁は背面側、右側縁は腹面側に加工が施される。2は緑色泥岩製の磨製石斧で、刃部は円刃で、刃先は摩滅する。3は凝灰岩製の台石で、表面中央付近に3カ所の窪みがあり、この部分は敲打後、擦られている。全体に炭化物が少量付着する。

4~13はH-3 出土で、層位は8が床面の礫集中HS-1、4・11・13が床面直上、6がHP-1 覆土、それ以外は覆土5・6層である。4~6はスクレイパーで、4と6は同一母岩の可能性がある。4は原礫面を残し、厚みのある剥片の右側縁に刃部があり、5は横長剥片の背面全周が加工される。6は下端部に急角度の刃部があり、図示していないが覆土中の両面調整石器と接合した。7は緑色泥岩製の磨製石斧で、表面や上端部が、薄く再加工される。8・9は砂岩製のたたき石で、扁平礫の上下の端部に細かなたたき痕がある。10は安山岩製のすり石の折損品、右側縁には打ち欠きや敲打痕がみられる。11~13は扁平打製石器である。11は扁平礫の長辺、12は半割した素材の割れ面にV字状の加工と使用痕がある。13は図上端部がV字状に加工される。石材は11・13が安山岩製、12が砂岩製である。礫石器は全般にやや赤みがあり、煤が付着するなど被熱する。

14はH-4 覆土出土のスクレイパーで、右側縁に内湾した刃部がある。

15~19はH-5 覆土出土である。15は石鏃で、先端部と基部を被損するが、柳葉形と推測する。16は石槍・ナイフで、下半部を欠損する。粗い二次加工で柳葉形に成形される。17はスクレイパーで、縦長素材の全周が加工され、左側縁から下端部は微細な剥離が施される。腹面や背面側の下端部には光沢が残る。18は砂岩製のたたき石で、扁平礫の右側縁と下端部が使用により剥離する。19は安山岩製の扁平打製石器で、全体に炭化物が付着し、上下端部に使用面が残る。

20~28はH-6 出土で、層位は23・24・28が床面、それ以外は覆土である。20は柳葉形の石鏃である。21・22はつまみ付きナイフである。21は黒曜石の横長剥片が利用され、背面側には原礫面が残る。黒曜石原産地分析では赤井川産と推定された。22は両面が加工される。23・24はスクレイパーである。いずれも縦長剥片素材で、23は断面形が三角形の剥片の右側縁に細かな剥離があり、24は背面の両側縁に粗い剥離がみられる。25・26は筈状石器、いずれも両面が加工され、下端部の刃部は25が直線的、26が曲線的である。27は両面調整石器で、右側縁が直線的である。28は安山岩製の扁平打製石器、裏面は割れ面で、表裏面とも全体にすり痕がある。

29~37はH-7 出土で、層位は29・34・36が床面、33がHS P-2 覆土、それ以外は覆土である。29は石鏃で、横長剥片素材で、背面が主に加工される。30は長さ18.3 cmの石槍・ナイフで、左側縁の下部には原礫面があり、厚みが残る。31は背面に原礫面が残るつまみ付きナイフである。32~34はスクレイパーである。32はトランシェ様石器に形状が似るもので、右側縁の腹面側には光沢がある。33は右側面が折れ面の細長い剥片素材が利用される。34は円形の剥片の左側縁に曲線的な刃部がある。35は下端部が曲線的な筈状石器で、中央部には厚みが残る。36は砂岩製のたたき石で、側面に細かな使用痕がある。37は安山岩製の扁平打製石器で、表面の下端部にすり面からの剥離がみられる。

38~43はH-8 覆土出土である。38は石鏃、先端部がやや突出する菱形である。39はつまみ付きナイフである。つまみ上部は三角形で、下端部は両側縁にノッチ状の抉りが施され、先端部は尖る。40は筈状石器で、下端部の背面側には、稜が摩滅する使用痕がみられる。41は凝灰岩製のたたき石で、表面に窪

だたき痕が残る。42は扁平打製石器で、下端面に幅1.2cmのすり面があり、上端の稜部の一部にも、すり面が残る。43は石錐で、長軸の両端に打ち欠きがあり、左側面には敲打痕もみられる。42・43はやや緑がかった砂岩製である。

44～51はH-9出土で、層位は46・49～51が床面、それ以外は覆土である。44は円基の石鏃である。黒曜石製で、原産地分析では赤井川産と推定された。45は石鏃転用の石錐である。有茎の石鏃の先端部が摩滅する。46は先端部半分が破損するが、薄く加工されており、石槍・ナイフとした。47は縦長剥片の右側縁に刃部があるスクレイパーである。48は緑色泥岩製の磨製石斧、両刃の刃部は刃潰れし、上端面は敲打痕がある。49は砂岩製のすり石で、表裏面にすり面がある。50は砂岩製の北海道式石冠で、溝部分は敲打後、擦られている。51は凝灰岩製で、下端部の加工部分以外は原礫面が残る扁平打製石器である。

土坑(P)出土 (図V-42～78-52～351)

52～55はP-1覆土出土である。52は先端部半分が破損するが、薄く加工されており、石槍・ナイフとした。53はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁に刃部がある。54は安山岩製の石鏃である。55は緑がかった滑石製の缺状耳飾の未成品である。厚みは2mm程度と薄く、形状は撥形で、下端は直線的で中央は窪む。上部には直径約2mm孔があけられ、孔より上部は破損する。孔の下部から下端の窪みにかけては、直線状に溝を擦り切ろうとした痕跡が残る。左側面には4カ所の刻みがみられる。

56・57はP-2覆土出土である。56はスクレイパーで、両側縁に曲線的な刃部がある。57は立方体状の大型の石核で、半分に割れる。石核の周囲にRフレイクや剥片が接合した(詳細は接合資料9)。

58・59はP-3覆土出土である。いずれもスクレイパーで、58は円形の剥片の周縁、59は縦長剥片の下端部に急角度の剥離がそれぞれ施される。

60・61はP-4覆土出土の石製品である。60は安山岩製で、断面形が六角形、長さ20cm程の細長い角柱礫で、明瞭な加工痕はないが、石製品とした。上下とも破損している。61は凝灰岩製で、表面に複数の窪みがある。加工痕はなく、自然の窪みである。有孔礫の類とした。

62はP-5覆土出土のたたき石で、下端面に散発的なたたき痕がある。

63～69はP-6覆土出土である。63・64は石鏃で、63は三角形回基、64は有茎の柳葉形を呈する。65はつまみ付きナイフで、縦長の石刃状素材が利用される。66は両面調整石器で、粗い二次加工で木葉形に成形されるが、下端部が破損する。67は縦長剥片素材のスクレイパーで、下端部に急角度の曲線的な刃部がある。68は垂円形のチャート製たたき石で、下端面に細かなたたき痕がみられる。69は上下の長辺とも断面V字状に加工され、下端面にすり面がある。

70～74はP-7覆土出土である。70は石錐で、剥片の下端部を加工して機能部を作り出している。71はスクレイパーで、厚みのある縦長剥片の右側縁腹面に剥離が施される。72は灰色の泥岩製の石のみで、両側面には擦り切りの痕跡がみられ、表面中央には直線的な線刻がある。73は安山岩製の北海道式石冠で、下部1/3程度が残存する。広いすり面を有し、側面は全面敲打で整形される。74はメノウの棒状原石で、下端部にはわずかに敲打痕があるため石製品とした。

75はP-8覆土出土、先端部が破損する柳葉形の石鏃で、下端部は平基である。

76～81はP-9出土で、層位は79・80が覆土下位、それ以外は覆土である。76はスクレイパーで、右側縁にやや内湾する刃部があり、下端部は尖る。77は中央で2つに割れた両面調整石器で、色調は赤褐色を呈し、上半部はやや厚みが残る。78は石核で、表裏面とも上方から連続して剥離され、下部には原礫面が残る。全体に炭化物が付着する。また図示していないが、土坑出土の剥片が1点接合した。79・80は安山岩製のすり石で、扁平礫の平坦部分に平滑面がある。81は石製品、扁平な泥岩礫の表裏面の長軸中央

に複数の直線的な溝状の線刻が施される。

82～86はP-12出土で、層位は85が覆土下位の剥片集中PFC-1、それ以外は覆土である。82は柳葉形の石鏃で、先端部はやや細身である。83はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁の背面に細かな加工が施される。84は横長剥片素材の筥状石器で、下端部は曲線的である。85は粗い加工の両面調整石器で、背面側には原礫面が残る。86は基部側半分が残存する緑色泥岩製の石のみで、全体に炭化物が付着する。

87・88はP-13覆土出土である。87は菱形の石鏃、88はトランシェ様石器と類似したスクレイパーで、背面の下端部には急角度の風化面が残る。

89はP-14覆土出土のスクレイパー、右側縁や下端部に細かな剥離が施される。

90～94はP-16出土で、層位は92・94が坑底面、それ以外は覆土である。90は柳葉形の石鏃である。91はスクレイパーで、縦長剥片素材の右側縁に平坦な剥離がみられる。92は緑色泥岩製の磨製石斧で、片刃の刃部は刃こぼれするが、再加工されていない。表面には広く炭化物が付着する。93は両端に挟りがあるすり石で、下端面にすり面がある。砂岩製である。94は泥岩製の石錘で、両側縁と下端部に3つの挟りがあり、いずれも摩滅する。

95～102はP-17出土で、層位は95が覆土下位、100がPFC-1、98・99がPFC-2、それ以外は覆土である。95は上半分が破損するが、推計6～7cmの小型の石槍・ナイフである。96はつまみ付きナイフで、反りのある縦長剥片を素材とし、右側縁には急角度の刃部がある。97はスクレイパー、両側縁に刃部があり、左側縁の刃部には刃こぼれや摩滅、腹面には広く光沢がみられる。98～100は両面調整石器である。98は断面形が半円状で、背面に広く原礫面が残る。99・100は剥片集中PFC-1出土の剥片と、それぞれ接合し、100については接合資料1として図示した。99は柳葉形で、PFC-1の剥片が、背腹両面に接合した。100は左側縁が曲線的、右側縁が直線的のもので、背腹両面にフレイクが接合し、原石ままで復元された（詳細は接合資料1）。101・102は砂岩製の砥石である。101は三面に平滑な使用面があり、表面の中央は溝状である。102は上下端が破損するが、それ以外は全面が使用され、一部に条痕がみられる。

103・104はP-18覆土出土である。103は石錘で、剥片の一端に棒状の機能部が作出される。104は砂岩製のすり石で、扁平礫の平坦面に不明瞭なすり面がある。

105～109はP-19覆土出土である。105は木葉形・106は柳葉形の石鏃、106は黒曜石製で、原産地分析では赤井川産と推定された。107はつまみ付きナイフで、両側縁には細かな剥離が施される。108はスクレイパーで、背面側が加工され、右側縁に直線的な刃部がある。109は石核、転蹀を半割し、その一端から連続して縦長の剥片が取られている。下部には原礫面が残る。

110～113はP-20出土で、層位は113が坑底面、それ以外は覆土である。110は有茎の石槍・ナイフで、粗い二次加工により成形され、やや厚みが残る。111は石錘で、縦長剥片の下端部に機能部が設けられる。112はスクレイパーで、円形の剥片素材の右側縁に刃部があり、その周囲の背腹両面には光沢がみられる。113は扁平打製石器で、長辺上下端はV字状に加工されるが、使用痕はない。全体に煤の付着、被熱による赤色化がみられる。

114～119はP-21出土で、層位は114・116が覆土上部、115が覆土下位、117～119は坑底面直上である。114は石錘で、厚みのある剥片の一端に機能部があり、先端部は摩滅する。115・116は両面調整石器で、いずれも半形である。石槍・ナイフの可能性もある。117はスクレイパーで、下端部には急角度の刃部がある。118は凝灰岩製のたたき石で、表裏面中央は凹状に窪む。119は安山岩製の扁平打製石器で、下端部がV字状に加工され、一部平坦なすり面がみられる。全体に煤が付着する。

120・121はP-22出土で、層位は120が坑底面、121は覆土である。120はスクレイパーで、両側縁に刃部があり、腹面には広く光沢がみられる。121は安山岩製のたたき石で、左側面と下端面に散発的なたた

き痕がある。

122～126はP-23出土で、層位は124がPP-1覆土、それ以外が坑底面である。122は石錐、両面加工により棒状になり、上下端部に機能部が作出される。123は両面調整石器で、正面は上下から、裏面は左側縁から長い剥離が施されており、石核の可能性もある。124・125は砂岩製のたたき石、扁平礫の側面に細かなたたき痕がある。126は安山岩製の扁平打製石器で、下端部は表裏面より断面V字状に加工され、使用の擦り痕がみられる。全体に煤が付着する。

127～135はP-24出土で、層位は130・131・135が覆土下位、134が坑底面、それ以外が覆土である。127は柳葉形の石鏃である。128は棒状の石錐で、両面加工され、上下端に機能部がある。129はつまみ付きナイフで、右側縁に平坦な剥離が施される。130はスクレイパーで、横長剥片の下端部に刃部がある。131は両面調整石器で、土坑内の剥片と接合し、原石まで復元できた（接合資料2で詳述）。131は木葉形で、右側縁下位には打面が残る。132は石核で、表裏面とも周囲から剥離が連続して施される。上部には風化面の打面が残る。133は泥岩製の石のみ、全面が研磨され、上下に片刃の刃部がある。134は砂岩製の扁平打製石器で、下端面に断面U字状のすり面がある。135は砂岩製の砥石で、表裏面に湾曲する砥面と凹状のたたき痕があり、全体に被熱し赤色化する。

136・137はP-25の坑底直上出土である。136は両面調整石器で、周縁から粗い二次加工が施される。137は泥岩礫に自然に孔があいた有孔礫である。

138～142はP-29覆土出土である。138～140は石鏃、138は柳葉形、139は木葉形で、140は菱形で周縁に微細な剥離が施される。141・142は縦長剥片の両側縁に加工が施されるスクレイパーで、142は左側縁に急角度の刃部がある。

143～145はP-30覆土出土である。143はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁に刃部があり、下端部には微細な剥離がみられる。144は緑色泥岩製の石のみで、上下端部に片刃の刃部がある。145は泥岩製の扁平打製石器で、上下の側縁が加工され、下端面にはすり面がある。

146～151はP-31出土で、層位は149・151が坑底面、それ以外が覆土である。146は石槍・ナイフで、主に背面側に二次加工が施され、左側縁下部には両端に挟りがみられる。147は石錐で、両面加工で棒状に成形され、下端部は尖る。上部にはつまみ部分が設けられる。148はつまみ付きナイフで、縦長剥片の右側縁に刃部がある。149はすり石で、扁平礫の長辺側面の一端にすり面がある。150は形状が半月状の扁平打製石器である。全体に煤が付着する。151は石錐で両端に打ち欠きがある。149～151は砂岩製である。

152～154はP-32覆土出土である。152は柳葉形の石鏃、153は縦長剥片素材のスクレイパーで、背面の両側縁に剥離が施される。154は砂岩製のすり石、扁平礫の長辺下端面にすり面、それ以外の側面には敲打痕がある。

155～158はP-33出土で、層位は158が坑底面、それ以外が覆土である。155は柳葉形の石鏃である。156は凝灰岩製のたたき石で、棒状の扁平礫の表裏面に深い凹状のたたき痕がある。157は安山岩製のすり石で、扁平礫の長辺側面にすり面がある。158は板状の安山岩製の扁平打製石器の折損品で、全体に煤が付着する。

159・160はP-34出土で、層位は159が覆土、160が坑底面である。159は両面調整石器で、3点が接合した。下位の厚みを取る加工時に破損したものと考えられる。160は黒曜石製のつまみ付きナイフで、両面加工され、背面には原礫面が残る。原産地分析の結果、赤井川産と推定された。

161・162はP-36出土で、層位は161が坑底面、162が覆土である。161は横長剥片素材のつまみ付きナイフである。162はスクレイパーで、下端部に曲線的な急角度刃部がある。

163～167はP-37出土で、層位は166が坑底面、それ以外が覆土である。163は両面加工のつまみ付

きナイフである。164は筈状石器、撥形の形状で、下端部は直線的である。165は両面調整石器で、粗い二次加工で木葉形に成形される。166・167はたたき石である。166は頁岩製の扁平礫の側面下部にたたき痕がある。167は緑色泥岩製で、上下端部に細かなたたき痕がある。裏面に擦り切り痕がみられることから、石斧素材からの転用したものと考えられる。

168～170はP-38 覆土出土である。168は両面加工のつまみ付きナイフで、つまみ部が三角形である。169は石核で、打面を変えながら剥離され、サイコロ状である。170は砂岩製のたたき石で、扁平礫の上下端部に使用痕がある。171・172はP-39 覆土出土である。171はつまみ付きナイフで、腹面には炭化物が付着する。172は縦長剥片素材のスクレイパーである。

173～181はP-40 出土で、層位は174・177～179が焼土PF-1、それ以外が覆土である。173は有茎、174は柳葉形の石槍・ナイフである。173は細身で、基部が非常に長い。175・176はつまみ付きナイフである。175は背腹両面の両側縁に剥離が施され、下端部にも刃部がみられる。176は両側縁に挟りが作出され、明瞭な刃部はない。黒曜石製で、原産地分析では赤井川産と推定された。177はスクレイパーで、反りの強い縦長剥片の両側縁と上端部に刃部がある。178は両面調整石器で、周囲から粗い加工で木葉形に成形される。179は細長く扁平な凝灰岩製のたたき石で、表裏面に2か所ずつの凹状のたたき痕がある。180は砂岩製のすり石で、扁平礫の長軸両端に挟りがあり、下端面にすり面がある。181は泥岩製の扁平打製石器で、長辺が断面V字状に加工され、使用により一部摩滅する。裏面には広く原礫面がある。

182～186はP-41 覆土出土である。182はつまみ付きナイフで、左側縁に平坦な、右側縁に微細な剥離がある。183・184はスクレイパーである。183は左側縁に平坦、左側縁に微細な剥離がみられる。184は下端部に急角度の刃部がある。185は緑色泥岩製の磨製石斧の擦り切り残片である。表裏面や側面の各面で、擦り切りや折り取りの痕跡が残り、上端面は全面敲打され、下部は破損する。186は砂岩製の石皿で、表面全体に使用痕があり、中央付近にはより平滑な面がある。

187～192はP-42 出土で、層位は191・192が坑底面、それ以外が覆土である。187は木葉形の石鏃である。188・189は柳葉形の石槍・ナイフで、188は2つに破損後、上部部分を再加工するが、途中でやめている。189は基部が曲線的である。190は石錐、表面と右側面が風化面の縦長剥片に長い機能部が作出される。191・192はスクレイパーで、191は左側縁、192は右側縁に刃部があり、それぞれ反対側の側縁には微細な剥離が残る。

193～195はP-45 覆土出土である。193はつまみ付きナイフである。左側縁は折れ面で、その形状を利用して、つまみ部を作出している。194はスクレイパーで、左側縁に刃部がある。195はつまみ付きナイフのつまみ部に似るが、上端にもノッチが入れられ、Y字状になる。異形石器とした。

196～198はP-46 覆土出土である。196はつまみ付きナイフで、縦長剥片素材に最小限の加工が施される。197は断面形が半円形の両面調整石器である。198は凝灰岩製の石鋸で、下端部の使用面の断面形はU字状である。

199はP-47 覆土出土のスクレイパー、幅広の縦長剥片の左側縁に刃部がある。

200・201はP-48 覆土出土である。200はスクレイパーで、表面は原礫面が残り平坦で、裏面は全面加工されている。201は乳白色の泥岩製の有孔礫で、裏面の孔周囲にわずかに擦痕がある。

202・203はP-49 覆土出土である。202は刃部の両側縁にノッチ状の加工がされた、つまみ付きナイフである。203は安山岩製の北海道式石冠の折損品で、下端部のすり面には、たたき痕もみられる。

204～206はP-50 覆土出土である。204はスクレイパーで、縦長剥片の右側縁に刃部がある。205は石核で、打面を変えながら、縦長の剥片が取られている。206は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側縁に浅い使用痕がある。

207・208はP-51出土で、層位は207が覆土、208が坑底面である。207は黒曜石製の両面加工のつまみ付きナイフで、つまみ部上端は風化面である。原産地分析では赤井川産と推定された。208は石核で、正面左側面は図示していないが、全面原礫面である。全体に風化し、剥離の痕が摩滅する。

209はP-52覆土出土のスクレイパーで、横長剥片の背面側の周囲が加工される。

210～217はP-53出土で、層位は213がPF-1上面、それ以外が覆土である。210は柳葉形の両面調整石器で、中央付近で半分に割れた2点が接合した。先端部はやや厚みがあり、原礫面がある。210には覆土出土の剥片が52点接合した（詳細は接合資料3）。211はスクレイパー、左側縁に曲線的、右側縁に直線的な刃部がある。一部に炭化物が付着する。212は石核で、P-22出土のRフレイク2点と接合した。四角柱状で、主に上下端から剥離される。213・214は緑色泥岩製の石のみで、表裏面の上部と側面に炭化物が付着する。214は磨製石斧で、刃縁は直線的である。215は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側縁に散発的なたたき痕がある。216は凝灰岩製の扁平打製石器で、両端に挟りがあり、下端のすり面は、V字状に再加工される。217は軽石製の石製品、北海道式石冠を模したような形状に研磨され、下端部は破損する。

218～223はP-54出土で、層位は219が坑底面、それ以外が覆土である。218は菱形の石核で、下端部は破損する。219はスクレイパーで、左側縁と下端部に刃部がある。220は両面調整石器で、周囲からの剥離により、円形に近い形状である。221は安山岩製の扁平打製石器で、全周が剥離により断面V字状に加工される。全体に煤が付着する。222は砂岩製のたたき石で、扁平礫の上下端に使用痕がある。223は安山岩製の石皿で、半分が破損する。表面に平滑なすり面がある。

224～226はP-55覆土出土である。224はつまみ付きナイフで、縦長剥片の両側縁に微細な加工がある。225はスクレイパーで、左側縁は直線的、右側縁は曲線的な刃部がある。226は緑色泥岩製の磨製石斧の未成品とした。表裏両面に粗い二次加工が施されるが、表面は上部と側縁のみの加工で、原礫面を広く残す。

227・228はP-56覆土出土である。227はつまみ付きナイフで、下端部に厚みのある刃部が作出される。228はスクレイパーで、右側縁に直線的な刃部があり、刃部の腹面側には光沢が残る。

229・230はP-57覆土出土である。229は両面調整石器で、柳葉形に粗く加工され、裏面は厚みが残る。230はスクレイパーで、小型の楕形である。

231～236はP-58覆土出土である。231は柳葉形の石核で、先端部が細長く尖る。232はつまみ付きナイフで、背面の右側縁に剥離がみられる。233は平面形が円形のスクレイパーである。234は安山岩製のたたき石で、表面の平坦面に浅いたたき痕がある。235は砂岩製のすり石で、扁平礫の両端に挟りがあり、下端面にすり面がある。236は安山岩製の石製品とした。形状は扁平な長方形で、上部は破損し、全体の半程度と考えられる。側縁部は全周擦られ、側縁の断面は丸型もしくはV字状である。平坦面も軽く擦られている。

237～241はP-60出土で、層位は240が坑底面、それ以外が覆土である。237は柳葉形の石槍・ナイフで、一部に煤が付着する。238は縦長剥片素材のスクレイパーである。239は緑色泥岩製の擦り切り残片で、右側面に折り取り痕があり、裏面は大きく剥離する。240は安山岩製の扁平打製石器で、長辺下端にすり面がある。241は砂岩製のすり石で、扁平礫の下端のすり面は、細く再加工される。上端面には敲打痕、右側縁には挟りがみられる。

242～245はP-61覆土出土である。242は柳葉形の石槍・ナイフである。243縦長剥片素材のはつまみ付きナイフで、左側縁に細かな加工が施され、右側縁には原礫面が残る。244はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁に刃部がある。245は凝灰岩製のたたき石で、表裏面に2か所ずつ凹状のたたき痕がある。

246～254はP-62出土で、層位は248～250・252・252が坑底面、253が覆土下位、それ以外が覆土である。

246は菱形に近い有茎の石鏃である。247はつまみ付きナイフで、右側縁に急角度の刃部があり、下端部は尖る。248はスクレイパーとしたが、形状から機能部が折れた石鏃の可能性もある。249・250は凝灰岩製のたたき石で、いずれも扁平礫の平坦面に主たるたたき痕がある。251は安山岩製の北海道式石冠で、割面も含め、全体に炭化物が付着する。頭頂部以外は敲打後、擦って整形されている。252は砂岩製の石皿で、表面の平坦面に、やや平滑なすり面がある。253は砂岩製の棒状礫である。図では敲打や剥離の表現がされているが、礫面が脆いため、取り上げ時に原礫面が剥がれたものである。254は軽石製の石製品で、全面が研磨される。横断面は不整の三角形で、下端面は平坦である。

255はP-63 覆土出土のたたき石で、棒状礫の下端面にたたき痕、剥離痕がみられる。

256・257はP-64 出土で、層位は256が覆土下位、257は覆土である。256は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側縁に1か所たたき痕がある。257は安山岩製の北海道式石冠である。下端部は、すり面側から全周剥離されている。

258～261はP-66 出土で、層位は259が坑底面、260・261が覆土下位、258が覆土である。258は片面加工のつまみ付きナイフである。259は上半分を破損する砂岩製のたたき石で、棒状礫の平坦面や側面にたたき痕がある。260は安山岩製の扁平打製石器の折損品で、上下端部がV字状に加工され、下端面に使用痕がある。261は礫岩製の石皿で、表裏面ともにやや窪んだ使用面が広くみられる。

262～266はP-67 出土で、層位は262がP-1 覆土、265・266が坑底面、それ以外が覆土である。262は柳葉形の石鏃で、基部下端は破損する。263・264はスクレイパーである。263は背面側が全面加工され、断面は半円形である。264は右側縁に曲線的な刃部がある。265は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側縁に使用痕がある。266は凝灰岩製の扁平打製石器、破損するが平面形は三角形に近い形状で、側縁と上部に挟り状の加工が施される。

267～270はP-68 覆土出土である。267は柳葉形の石鏃で、先端部は細長く尖る。268・269はスクレイパーで、いずれも縦長剥片素材の左側縁に刃部がある。270は緑色泥岩製の磨製石斧で、両側縁には擦り切り痕が残り、折り取り面は研磨される。

271～274はP-69 覆土出土である。271は白色、272は黒色の頁岩製の柳葉形の石鏃である。271は両側縁下端近くにノッチが入る。272は全体に摩滅し、光沢がある。273・274は砂岩製の北海道式石冠である。273は下端部のすり面側から全周が剥離される。274は下端部のすり面部分の破片で、割れ面も含め煤が全体に付着する。

275・276はP-70 出土で、層位は275が覆土、276が坑底面である。275はつまみ付きナイフ、276はスクレイパーで、いずれも右側縁に平坦な、左側縁に微細な剥離が施される。

277・278はP-71 覆土出土である。277は菱形の石鏃で、先端部と基部周辺にのみ細かな加工が施される。278はトランシェ様石器に似た形状のスクレイパーである。

279～284はP-72 出土で、層位は282～284が剥片集中PFC-1、それ以外が覆土である。279は柳葉形の石槍・ナイフで、やや左右非対称である。280は石鏃で、薄い縦長剥片が利用される。281はスクレイパーで、右側縁に主な刃部がある。282は両面調整石器の破片である。283は石核で、厚みのある素材から縦長の剥片が取られている。282・283は、覆土中のPFC-1の剥片と接合し、原石素材に復元された(詳細は接合資料12)。284は扁平打製石器で、上下端部がV字状に加工される。

285はP-74 覆土出土の安山岩製の北海道式石冠である。

286はP-75 覆土出土のスクレイパーで、両側縁に刃部がある。

287～290はP-78 出土で、層位は288が坑底面、それ以外が覆土である。287は転石利用の石核で、表裏面の上部から連続して剥離される。288は安山岩製のたたき石で、扁平礫の上下端部や側面に複数のた

たき痕がみられる。289 は安山岩製のすり石で、扁平礫の表裏の平坦面にすり面がある。290 は砂岩製の砥石で、四角柱状の素材の二面に平坦な砥面がある。

291・292 は P-79 出土で、層位は 291 が坑底面、292 が覆土である。291 は筥状石器で、下端部は曲線的である。292 は石核、サイコロ状で、図示していない裏面は原礫面である。

293・294 は P-81 覆土出土である。293 はスクレイパーで、縦長剥片の背面側の周縁に加工が施される。294 は砂岩製のすり石で、表裏の平坦面と下端部にすり面がある。割れ面も含め全体に炭化物が付着する。

295～298 は P-82 出土で、層位は 300 が炭化物集中上面、それ以外が覆土である。295 は柳葉形の石鏃で、先端部は細く尖る。296 は石鏃で、縦長剥片の両側縁と下端部が加工される。297 はスクレイパーで、背面側の全周に剥離がみられる。298 は砂岩製のたたき石で、扁平礫の下端面に細かなたたき痕がある。

299 は P-86 覆土出土の泥岩製のたたき石で、小型の扁平礫の下端側縁部を使用している。

300 は P-87 覆土出土の砂岩製のたたき石で、扁平礫の長軸端部にたたき痕がある。

301～308 は P-88 出土で、層位は 301・304 が坑底面、305 が剥片集中 PFC-1、それ以外が覆土である。301 は有茎・302 は柳葉形の石鏃である。303 は石鏃で、剥片の一端に突出する機能部が作出される。304 はスクレイパーで、右側縁上部に刃部があり、下端部は折れ面である。305 は両面調整石器で、粗い二次加工で木葉形に成形される。図示していないが P-88 覆土出土のフレイク 7 点が左側縁部に接合した。306 は泥岩製の擦り切り残片で、右側縁に擦り切り痕があり、表裏面にも擦り切りの溝が残る。上部は破損する。307 は砂岩製のたたき石で、扁平礫の上下端と側面にたたき痕がある。308 は凝灰岩製の砥石で、棒状礫の下位の各面に砥面がある。

309～311 は P-89 覆土出土である。309 は有茎の石槍・ナイフの基部側半分で、返し部分と約 5 cm の細長い基部がある。310 は片面加工のつまみ付きナイフで、下端部は曲線的である。311 は砂岩製のたたき石で、棒状礫の上下端部にたたき痕がある。

312・313 は P-90 覆土出土である。312 はつまみ付きナイフで、縦長剥片下端の尖った部分につまみ部が作られる。313 は泥岩製の石鏃で、長辺の一端に断面形が V 字状・U 字状のすり面がある。

314～316 は P-91 覆土出土である。314 は菱形、315 は木葉形の石鏃である。316 は凝灰岩製の砥石で、やや湾曲した砥面が表裏面にあり、一部に線条痕もみられる。割れ面も含め全体に煤が付着する。

317・318 は P-92 覆土出土である。317 はつまみ付きナイフで、両側縁には微細な剥離がみられる。318 はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁に平坦な、右側縁に微細な剥離がある。

319・320 は P-93 覆土出土である。319 は石核で、原石の上端側から表裏両面が剥離され、それ以外は原礫面が残る。320 は泥岩製の石製品とした。扁平礫の表裏両面に 2 か所ずつ凹状のたたき痕があり、平坦面は擦られている。線条痕が複数みられ、表面では凹状の窪みの間には深い線条痕がある。全体に炭化物が付着する。

321～323 は P-94 覆土出土である。321 はつまみ付きナイフで、つまみ部上端部に挟りがみられる。322 は砂岩製の扁平打製石器で、下端面のすり面は剥離により、V 字状に再加工されている。323 は砂岩製の砥石で、表面にやや窪んだ砥面があり、線条痕もみられる。全体に炭化物が付着する。

324～331 は P-95 出土である。層位は 330 が坑底面、それ以外が覆土である。324 は石鏃で、剥片の一端に棒状の機能部があるが、その先端部は破損する。325 はつまみ付きナイフで、右側縁下位に刃部がみられる。326 はスクレイパーで、縦長剥片の左側縁に刃部があるほか、上下端に挟りが作出される。327 は黒曜石製の両面調整石器で、上端部に転石の原礫面が残り、下端部には刃潰れがみられる。原産地分析では青森県木造産と推定された。328 は緑色泥岩製の磨製石斧で、全面が研磨され、全体に炭化物が付着する。329 は安山岩製のたたき石で、円礫の一端に使用痕がある。330 は安山岩製の扁平打製石器で、長辺の上下

端部は断面形がV字状に加工され、下端部にはすり面がある。331は泥岩製の石鐙で、下端部のすり面の断面は丸みを帯びる。すり面以外は炭化物が付着する。

332・333はP-96出土で、層位は332が覆土、333が覆土下位である。332はスクレイパーで、右側縁に曲線的な刃部がある。333は石核で、打面から連続して剥離し、その後打面を再度調整している。

334～336はP-98覆土出土である。334はスクレイパーで、縦長剥片素材の全周に加工がある。335は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側面に使用痕がある。被熱により赤みがあり、一部に炭化物も付着する。336は軽石製の石製品で、北海道式石冠様の形状だが、上部は楕円形の突起状になる。

337～339はP-99覆土出土である。337は柳葉形の石鐙で、先端部はやや細長い。338はスクレイパーで、両側縁に刃部がある。339は安山岩製の扁平打製石器で、扁平礫の周縁はV字状に加工される。被熱し赤みがあり、一部に炭化物が付着する。

340～343はP-100覆土出土である。340はつまみ付きナイフで、背面側が主に加工され、右側縁に曲線的な刃部がある。341は砂岩製の扁平打製石器、裏面は剥離面で、扁平礫を側面から半割した素材が利用される。上下端にすり面がある。342は砂岩製の石鐙で、扁平礫の長軸両端に挟りと敲打痕がみられる。343は安山岩製の石皿、長径が60 cm近い大型のもので、表面には平滑なすり面が広くみられる。

344～346はP-101覆土出土である。344は菱形の石鐙である。345は横長剥片素材のスクレイパーで、背腹両面が焼け弾け、表面左側は破損する。346は緑色泥岩製の全面研磨の磨製石斧で、基部側は破損する。

347～350はP-102覆土出土である。347・348はつまみ付きナイフで、いずれも主に背面側縁が加工され、下端部は尖る。347は比較的低角度の刃部があり、348は一部に煤が付着する。349は縦長剥片素材のスクレイパーで、下端部には急角度の刃部がある。350は砂岩製のたたき石で、扁平礫の側面に複数のたたき痕がある。

351はP-103坑底面出土の砂岩製のたたき石で、扁平礫の側面に散発的なたたき痕がある。全体に炭化物が付着する。

小土坑 (SP) 出土 (図V-78-352・353)

352・353はSP-58出土の石核である。352は表裏面とも上下端から剥離され、下端部断面は尖る形状である。353は上端から表裏面を入れ替えながら連続した剥離が施され、下位には原礫面が残る。

盛土遺構 (M) 出土 (図V-79-85-354～428)

MAは土層断面で確認したため、遺物は出土していない。

354～405はMB出土である。層位は356・390・398・399が盛土最下位、364・366・404が盛土下位、391が盛土1回目、376・383・395・397がMBFC-1、384がMBFC-8、386がMBFC-10、385がMBFC-23出土、それ以外が盛土である。

354～361は石鐙である。358・361は黒曜石製で、原産地分析では赤井川産と推定された。354～357は平面形が柳葉形、358・359は菱形、360は三角形、361は有茎である。354～356は先端部が細長く尖り、357は円基である。358は腹面に剥離面が広く残る。359は両側縁下部がややくびれる。360は先端部がやや突出する。361は左右非対称である。

362・363は平面形が柳葉形の石槍・ナイフである。362は基部が曲線的で、背面左側縁上部には折れ面が残る。363は約18 cmの長さで、尖頭部が21 G区、基部が23 E区とやや離れた地点のものが接合した。

364～367は石鐙である。366・367は黒曜石製で、原産地分析では、いずれも赤井川産と推定された。364・366は稜のある縦長剥片素材を棒状に加工したもので、機能部の断面形は三角形である。365は両面

加工により、長い刺突部が作出される。367は機能部以外も両面加工である。

368～372はつまみ付きナイフである。371・372は黒曜石製で、原産地分析では371が赤井川産、372は青森県出来島木造産と推定された。368～370は稜を持つ縦長剥片素材の背面側が加工される。371は両面加工され、下端部は尖る。372は両面調整された石器の破片が利用され、図正面とその裏面は割れ面、側面は元々の両面加工部分にあたる。つまみ部は作り出されるが明瞭な刃部はない。

373～375は撓状石器である。いずれも両面加工され、下端部には373・374が曲線的、375が直線的な刃部がある。378の刃部は刃潰れし、表裏面とも光沢が残る。

376～382はスクレイパーである。376～379は縦長剥片素材の両側縁と下端部が加工される。376は右側縁と下端部に微細な剥離がみられ、377・378は下端部に急角度の刃部がある。379は左側縁が直線的で、右側縁はやや外湾する刃部とノッチ状の加工がある。380は横長剥片素材の下端部に直線的な刃部がある。381は両側縁に挟りがみられるもので、下端部には急角度の刃部がある。382は側縁に鋸歯状の刃部があるもので、正面左側面には原礫面が残る。

383～386は両面調整石器である。383はMBFC-1出土で、平面形が円形に近い形状である。384はMBFC-8出土で、平面形が木葉形で、断面形は半円状である。385はMBFC-23出土で、平面形が柳葉形で、中央付近で2つに割れている。さらに周囲の剥片44点と接合した（接合資料7）。386はMBFC-10出土で、上端部には打面がみられる。周囲の石核（387）や剥片と接合した（接合資料6）。

387～389は石核である。387は表面上端から連続して縦長の剥片が取られており、両面調整石器（386）や剥片と接合した（接合資料6）。388・389は上部の打面から連続して剥離が施される。

390～393は磨製石斧類である。390・391は泥岩製の石のみで、いずれも素材の一端が研磨され、刃部が形成される。391は一部に炭化物が付着する。392・393は緑色泥岩製の磨製石斧で、392は刃部に刃こぼれがみられる。393は表面右側縁に擦り切り痕があり、左側面には炭化物が付着する。

394・395はたたき石で、いずれも扁平礫が利用される。394はチャート製で上下端部、395は泥岩製で側面にたたき痕がある。

396・397は扁平礫利用のすり石である。396は砂岩製で長軸両端に挟りがあり、下端面にはすり面、上端面には敲打痕がある。397は安山岩製で、表裏の平坦面が全体に擦られている。

398・399は安山岩製の扁平打製石器で、板状または扁平礫の長辺がV字状に加工され、すり面がみられる。いずれも炭化物が付着する。399は長軸両端に挟りがある。

400は安山岩製の北海道式石冠の折損品で、全体に煤が付着する。

401は凝灰岩製の砥石で、表裏面に窪んだ砥面があり、被熱し赤みを帯びる。

402～405は石製品である。402は灰白色の泥岩製で、下部は破損する。頭頂部は楕円形に成形され、それより下位は扁平な棒状に加工されている。403は緑色泥岩の原石が全体に研磨される。自然の窪みはあるが、孔はあけられていない。404は白色の凝灰岩破片を軽く磨き、その上部に直径4mmの孔が貫通している。405は軽石製で、全体に研磨される。正面の平面形は「しずく」形で、側面の形状は三角形、裏面は平坦面である。

406～421はMC出土で、層位は414・416がMFC-1、415がMFC-3、それ以外は盛土である。

406は柳葉形、407は有茎の石鏃である。406は黒曜石製で、原産地分析では土土幌産と推定された。

408～410はつまみ付きナイフである。408は黒曜石製で、小型で、腹面側が全面加工される。黒曜石原産地分析では赤井川産と推定された。409・410は縦長剥片を利用し、打点側につまみ部を作り出し、背面側が主に加工される。

411～413はスクレイパーで、いずれも縦長剥片が利用される。411は外湾する刃部がある。412は右側

縁に刃部があり、左側縁は折れ面である。413は背面全周に加工がみられる。

414・415は両面調整石器で、いずれも粗い加工で柳葉形に成形される。415は約半分が破損し、厚みが残る。

416は石核、サイコロ状の形状で、正面に複数の剥離がみられる。

417は片岩製の磨製石斧である。短冊状の形状で、刃縁には使用による剥離がみられる。

418は砂岩製のたたき石で、上下端部にたたき痕がある。419は砂岩製のすり石で、扁平礫の長辺下端に幅2.3cmすり面があり、すり面をV字状に再生する剥離が施される。すり面側に煤が付着する。

420・421は石製品である。420は縁がかった扁平の砂岩が利用され、側縁を中心とした研磨により、三角形に成形される。一部に炭化物が付着する。421は軽石製で、扁平で縦長の素材を研磨し、上位部分に溝が全周する。

422～427はMD出土で、層位はいずれも盛土である。

422は柳葉形・423は菱形の石鏃である。422は平基、423は黒曜石製で、原産地分析では赤井川産と推定された。424はスクレイパーで、縦長剥片の右側縁から下端縁に刃部がある。425は両面加工の篋状石器で、下端部の刃部には稜の摩滅や光沢面がみられる。

427は凝灰岩製の板状の石鋸で、下端部は使用により内湾する。一部に炭化物が付着する。426は安山岩製の石皿で約半分が破損する。表面には窪んだすり面がみられる。

遺構出土の接合資料（図V-86～91・428～435・表V-8 写真図版110）

土坑や盛土遺構の剥片集中では、石核や両面調整石器、剥片が接合するものが多かった。このうち8点（接合資料1～8）を図示し、4点（接合資料9～12）を写真のみ（図版110）で示した。

接合資料はすべて、頁岩素材である。原石素材は人頭大、手のひら大の扁平な亜円礫が多く、亜角礫は少ない。

接合資料1（P-17）：428

P-17 F C-1出土の両面調整石器（100）に、P-17のF C-1や覆土出土の剥片が39点接合した。接合資料は、長さ10.2cm、幅10.1cm、厚さ4.9cm、重量284gである。素材は手のひら大の扁平な亜円礫で、正裏面に原礫面がみられる。色調は原礫面が淡黄色、内部が黒褐色である。作業は素材上部に打面を作り出し、この打面や周縁からの剥離で、原礫面を除去する。その後、主に正面側の打面などで剥離が連続して行われる。最終的に両面調整石器（100）が得られているが、正面の原礫面から両面調整石器までは、空洞となっており、この部分でも他の剥片石器素材が取られた可能性がある。

接合資料2（P-24）：429

P-24出土の両面調整石器3点、石核1点、剥片62点が接合した。接合資料は、長さ19.6cm、幅13.7cm、厚さ7.8cm、重量1,720gで、平面形が半円形の原石素材である。色調は原礫面が淡黄色、内部が黒褐色である。左側面には割れ面状の平坦面があり、それ以外の側縁は稜をもつ形状である。原礫面は右側面の下部にわずかに残るのみで、風化面が左側面と正裏面にみられる。作業は、正面図の左側面以外の周囲から風化面を除去する剥離が行われた後、右側の稜部から正裏面とも連続した剥離がなされる。最終的には左側面の平坦な風化面を残す両面調整石器（131・132）が得られている。

P-24では覆土下位に焼土や炭化材がまとまる範囲があり、円筒土器下層d1式が6個体、扁平打製石器や砥石などの遺物も多く出土した。フラスコ状土坑を墓に転用したものと考えられる。この接合資料は、ほぼ隙間なく復元され、掲載した両面調整石器も風化面を残し、粗い加工しかされていない。石材から製品

を得るためではなく、副葬品として両面調整石器や剥片が取られた可能性がある。

接合資料3 (P-53): 430

P-53 出土の両面調整石器と剥片 52 点が接合した。剥片は P-53 PFC-1 出土のものが 39 点、P-53 覆土出土のものが 13 点である。接合資料は、縦長で扁平な原石となりそうで、大きさは長さ 18.5 cm、幅 9.8 cm、厚さ 4.7 cm、重量 392 g である。色調は灰黄褐色である。表裏面とも素材の周縁からの剥離が連続して施され、長さ 18.3 cm、幅 7 cm、厚さ 2.2 cm の柳葉形の両面調整石器を効率的に作り出している。両面調整石器 (210) は、中ほどで割れており、そのため廃棄されたと考えられる。折損した両面調整石器と剥片がともに土坑内に入れている。

接合資料4 (P-67): 431

P-67 出土の石核 1 点と剥片 56 点が接合した。接合資料は扁平な亜円礫素材と推定され、亜円礫の両側が割れた中央付近が利用されている。両面の割れ面は風化面である。形状は原礫面の平面形が細長い三角形、礫の断面である風化面の形状は楕円形である。大きさは、長さ 18.3 cm、幅 9.4 cm、厚さ 8.6 cm、重量 1,020 g である。色調は原礫面が黄褐色、内部は褐色を呈する。

作業は尖った素材の上端から風化面両面で剥離が連続して行われ、素材下位では図正面の風化面側から数回、裏側へ抜ける縦長の剥離が施される。いずれも縦長で大振りな剥片が取られており、原礫面や風化面を除去する剥離である。素材上部の中央部は長さ 7 cm、幅 5 cm、厚さ 3 cm 程の空洞となっていて、比較的小型の石器が作成された可能性がある。

接合資料5 (P-88): 432

P-88 出土の剥片 108 点が接合した。接合資料は、原礫面のある剥片が接合し、楕円形で扁平な原石素材の外側が復元された。大きさは、長さ 29.2 cm、幅 21.3 cm、厚さ 10.9 cm、重量 710 g で、色調は原礫面が灰白色、内部が褐色である。作業は素材の周縁から原礫面を除去する剥離が行われる。ほぼ長さ 10 cm を超える大振りな剥片である。素材中央は大きさは長さ約 20 cm、幅約 15 cm、厚さ約 6 cm の空洞で、大型の両面調整石器を作出したものと考えられる。

接合資料6 (MBFC-10): 433 AB

盛土遺構 MB の剥片集中 MBFC-10 と周辺の盛土出土の両面調整石器 1 点、石核 1 点、剥片 82 点が接合した。接合資料は、平面形が円形で扁平な原石素材で、右側半分はほぼ隙間なく復元され (433 A)、左側は下位部分 (433 B) のみが復元された。全体の大きさは、長さ 21.6 cm、幅 24.6 cm、厚さ 9.7 cm、重量 2,750 g、433 A 部分は、長さ 21.6 cm、幅 12.7 cm、厚さ 9.7 cm、重量 2,040 g、433 B 部分は長さ 17.9 cm、幅 14 cm、厚さ 7.8 cm、重量 710 g である。色調は原礫面が灰黄褐色、内部が褐色である。

作業は、素材を A・B に半割し、433 A では割れ面を平坦にする剥離や原礫面を除去する剥離が施される。その後は割れ面側から厚みのある剥片が取られ、そのうちのひとつが、石核 (387) の素材となっている。433 B は半割された原石の下位から側縁にかけて接合した。半割後、原礫面が除去され、下位に打面を設け、そこから両面調整石器 (386) の素材が取られている。

接合資料7 (MBFC-23): 434

盛土遺構 MB の剥片集中 MBFC-23 と周辺の盛土出土の両面調整石器 3 点、剥片 44 点が接合した。

2つ折れた柳葉形の両面調整石器(385)に剥片がついて、粗く加工したひと回り大きな両面調整石器に復元されたものである。大きさは長さ23.4cm、幅7.2cm、厚さ4.9cm、重量490gで、色調は灰白色である。上部には折れた両面調整石器先端部分が接合しており、元々の両面調整石器が折れたため、周縁からの剥離で、柳葉形の両面調整石器(385)に再加工されたと考えられる。この再加工品も、裏面からの打撃で割れている。

接合資料8 (MBFC-25) : 435

盛土遺構MBの剥片集中MBFC-25と周辺の盛土出土の剥片が105点接合した。接合資料は、平面形が菱形に近い扁平の原石素材で、大きさは、長さ23.6cm、幅15.8cm、厚さ7.9cm、重量1,470gである。色調は原石面・内部ともに黄褐色である。素材は、原礫面を有する剥片が接合し、中央は、長さ約17cm、幅約11cm、厚さ約4cmの空洞である。素材周縁から表裏の原礫面を除去し、両面調整石器を作出したものと考えられる。

接合資料9 (P-2) : 436

写真図版110に掲載した。P-2覆土出土の石核2点(57と未掲載)、Rフレイク3点、剥片31点が接合した。接合資料は丸みを帯びた原礫面と、節理面のある風化面がみられる原石素材で、大きさは、長さ18cm、幅15.2cm、厚さ13.8cm、重量2,400gである。色調は原礫面が灰白色、内部が黒褐色である。主に写真の左から2番目の上部では正面側から風化面を除去し、平坦な打面を形成するため連続した剥離がなされ、長い剥片が取られている。打面上面は空洞となっているため、この部分の縦長剥片は石器素材とされた可能性がある。その後打面から主に正面側で連続して剥離がなされる。写真の左から3・4番目の面は節裏面が段状となって露出した風化面で、ほとんど剥離は行われていない。素材の下半中央には比較的大きな石核(57)がある。

接合資料10・11 (P-22) : 437・438

写真図版110に掲載した。接合資料10は、P-22坑底面、剥片集中PFC-1、覆土の石核4点、Rフレイク10点、剥片35点が接合した。原石素材で、上部と側面に残る原礫面は平坦で、写真の左から3・4番目の面は平坦な風化面で、直方体に四角柱に近い形状である。大きさは、長さ17cm、幅12.4cm、厚さ11.7cm、重量2,100gで、色調は原礫面が浅黄褐色、内部が黒褐色である。作業は残った原礫面を除去し、写真の左から2番目の面の上部や右側面から剥離が行われる。内在する節理のため、うまく剥片が取れず、節理面で大きな塊として割れた素材を石核として利用している。

接合資料11は、P-22の坑底面と剥片集中PFC-1出土の剥片49点が接合した。長さ22.3cm、幅15cm、厚さ8.9cm、重量2,100gの平面形が楕円形で扁平な原礫素材である。色調は原礫面が浅黄褐色、内部が黒褐色である。原礫面を除去する作業は行わず、素材の側縁から粗く打ち割っている。剥片2点ほどを除きほぼ隙間なく復元したため、原石素材を土坑内で、打ち割った可能性がある。

接合資料12 (P-72) : 439

写真図版110に掲載した。P-72の坑底面、覆土下位、剥片集中PFC-1出土の両面調整石器1点、石核1点、剥片90点が接合した。平面形が三角形の扁平な原石素材で、中央は空洞である。大きさは、長さ18.3cm、幅14.9cm、厚さ7.9cm、重量1,060gである。色調は原礫面が灰白色、内部が黒褐色である。空洞の大きさは、長さ9cm、幅7cm、厚さ4cm程で、この大きさの石器素材が作出されたものと考えられる。

(2) 包含層出土の石器等 (図V-92～95-1～45 表V-9)

包含層出土の石器等は23,238点である。剥片が14,244点、礫8,449点突出して多く、定型の石器では、両面調整石器73点、スクレイパー70点、たたき石40点が多い。

剥片石器類

1～8は石鏃である。1～3は柳葉形で、1・2は先端部が細長くなる。4は菱形である。5は三角形で、基部は凹基である。6～8は有茎である。6は不明瞭な返しがあり、先端部は細長い。7は側縁がやや曲線的である。8は茎部が丸みを帯び、黒曜石原産地分析では赤井川産と推定された。

9～11は石槍・ナイフで、いずれも平面形が柳葉形である。9は尖頭部が破損し、背腹面の剥離の稜や両側縁が摩滅する。黒曜石原産地分析では赤井川産と推定された。10は表面中央付近に光沢がある。11は両側縁下部に抉りが施される。また両側縁の下半部は錯向剥離によりねじれがみられる。

12～14はつまみ付きナイフである。12は原礫面がある剥片を最小限の加工により、つまみ部、刃部を作り出している。13・14は縦長剥片の背面が加工されるもので、13は下部部が尖り、15は直線的である。

15～16は筈状石器で、下端縁が曲線的である。15は裏面の刃部近くで、剥離の稜の摩滅がみられる。

17～20はスクレイパーである。17・18・20は縦長剥片の一侧縁に刃部があるもので、下部部や刃部以外の側縁には微細な剥離が施される。17は左側縁の刃部裏面に光沢がある。18は右側縁の刃部が鋸歯状になる。19は下部部に厚い外湾する刃部がある。

21・22は両面調整石器である。21は粗い加工で楕円形に成形され、側縁は鋸歯状である。22は上端部に原礫面があり、周囲から比較的大きな剥離が施される。

23～25は石核である。23は上部に転石の原礫面を残し、下部部はV字状に剥離される。下部部には細かな剥離もみられ、石核ではなく、石器の可能性もある。24は小型で、打面を変えながら剥離される。25は上面の打面から比較的確長の剥片が取られ、最後は打面部分から横長の破片が取られている。

26～30は緑色泥岩製の磨製石斧類で、いずれも全面研磨され、刃縁は曲刃である。27・29・30は一部に炭化物が付着する。26は丸のみに近い細長い形状で、やや厚みがある。27は成形時の剥離の痕跡が残るもので、やや反る形状である。28は平面形が楕形で、左側縁には擦り切り痕が残る。29はやや小型で、表面に擦り切りと折り取りの痕跡が残る。30は石のみで、両側縁が擦り切られ、上下に刃部がある。

31～34はたたき石で、31・33は砂岩製、32は凝灰岩製、34はチャート製である。31・32は扁平礫の平坦面にたたき痕がある。31は浅いたたき痕で、32は凹状に深いたたき痕が表裏面に2か所ずつみられる。33・34は棒状礫の上下端部に細かなたたき痕がある。

35は砂岩製の北海道式石冠で、すり面付近が赤色化し、全体に煤が付着する。

36～38は安山岩製の扁平打製石器で、板状素材の長辺を表裏面からV字状に加工し、直線的な刃部が作出される。V字状の刃部は使用により、平坦なすり面となっている。36・37は煤が付着する。

39・40は板状の素材の各面に平坦な底面があるもので、39の上下は割れ面である。39は安山岩製、40は凝灰岩製である。

41・42は石錘で、平面形は円形に近く、両端に抉りがみられる。41は凝灰岩製、42は安山岩製である。

43～45は石製品である。43は黒曜石製で、上部につまみ部があり、下部部が浅く内湾した二股の突起部が設けられる。黒曜石原産地分析は行っていない。44は軽石製で、全面研磨される。下部面は平坦で、側面観は台形状で、一部破損する。45は石棒とした。風倒木痕からの単体で出土した。上部は破損するが、長さは24.7cm、幅11.6cmで、断面形は楕円形である。側面は全体に磨られるが、図示した面はやや窪む平滑面がある。下部部は粗く敲打され、破損した上部部の縁の部分には敲打痕がみられる。石材は凝灰岩製

で、被熱しやや赤みがかかる。

4. 漆製品 (図V-96-1 表V-10)

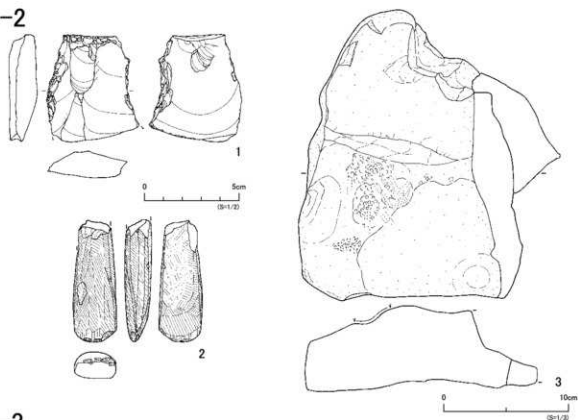
P-38から漆の塗膜片1点(付篇4項図版2)、P-62から漆製品1点の計2点出土した。

1はP-62出土の盆状の漆製品で、現場で土壌ごと切り取ったもので、その経緯や保存処理については付篇に詳しい。赤い塗膜部分が残存したもので、木胎の可能性が高い。形状は平面形が、長さ26.9cm、幅42.7cmの半円形である。製品は右側上半がよく残り、左下半部は周縁付近のみが残る。また右側の下端部は残存していない。上部の周縁部では斜めに立ち上がる高さ1.5cm程の縁が確認できる。

縄文時代前期後半の盆状の漆製品は、木古内町新道4遺跡C地区の円筒土器下層d1式期の土器集中内や、函館市(旧南茅部町)ハマナス野遺跡の円筒土器下層b2式期の土壌墓P-228出土のものなどの類例がある。

(愛場)

H-2



H-3

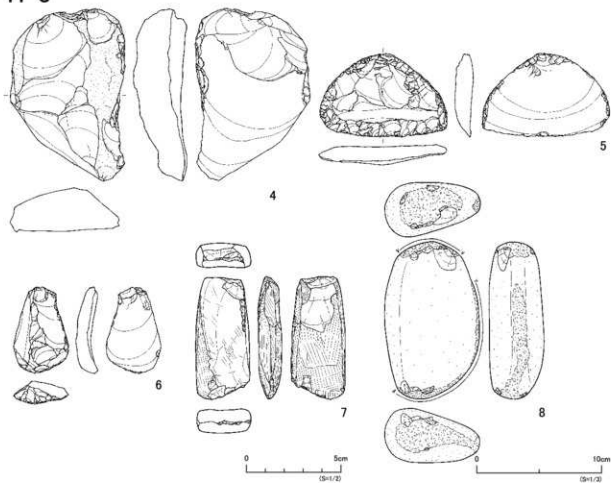
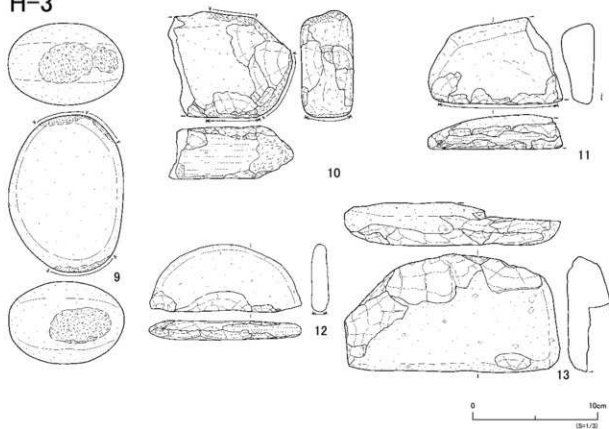


図 V-37 竪穴住居跡出土の石器等 (1)

H-3



H-4



H-5

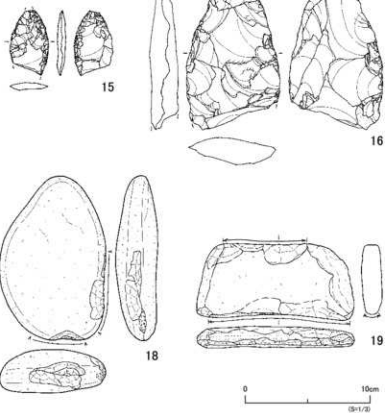


図 V-38 竪穴住居跡出土の石器等 (2)

H-6

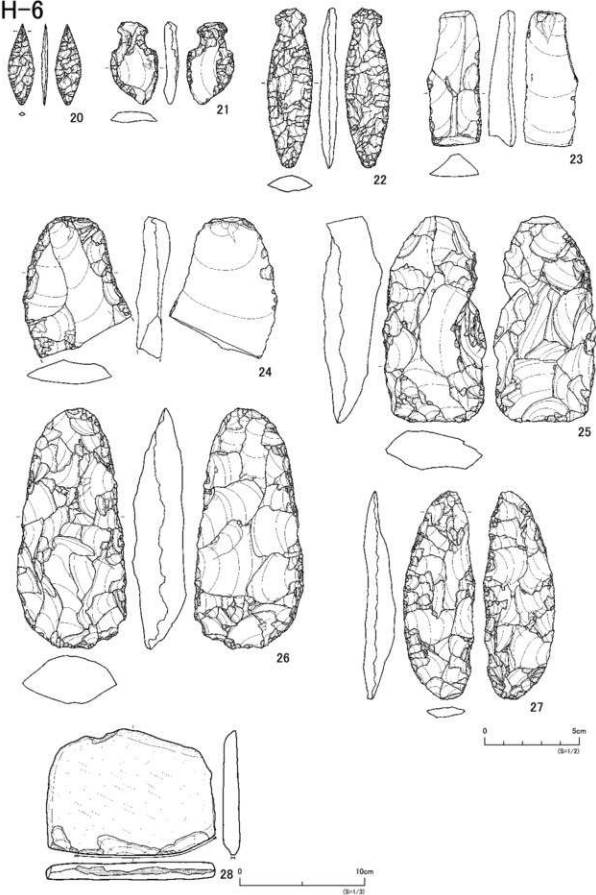


図 V-39 竪穴住居跡出土の石器等 (3)

H-7

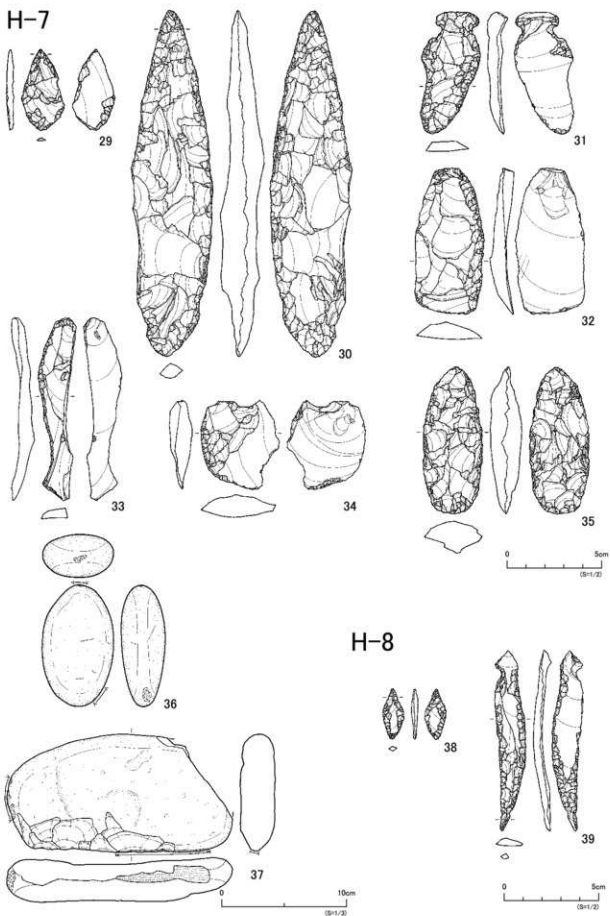
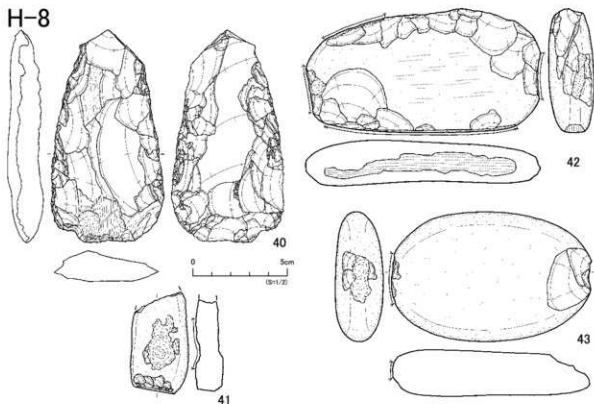


図 V-40 竪穴住居跡出土の石器等 (4)

H-8



H-9

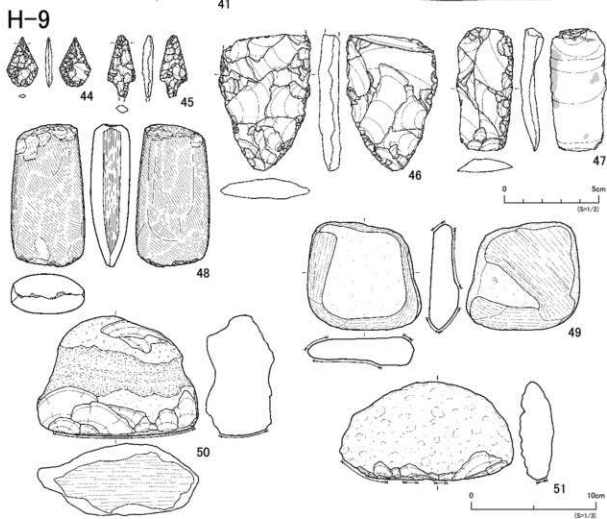
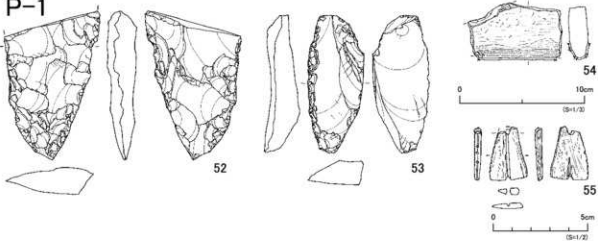
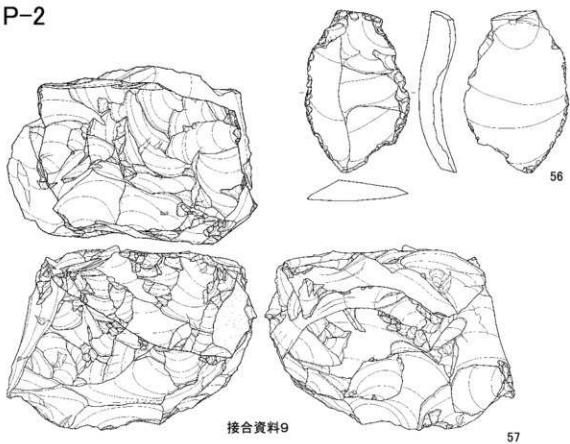


図 V-41 竪穴住居跡出土の石器等 (5)

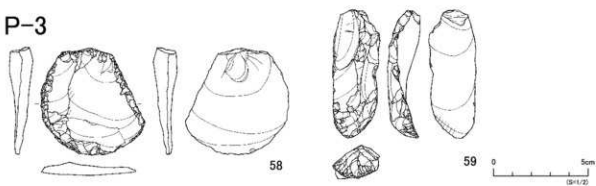
P-1



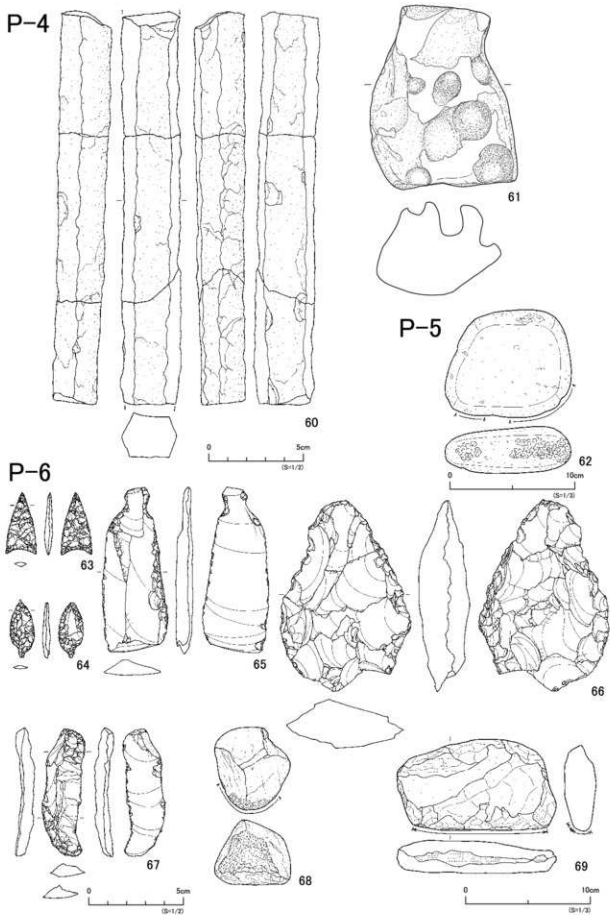
P-2



P-3

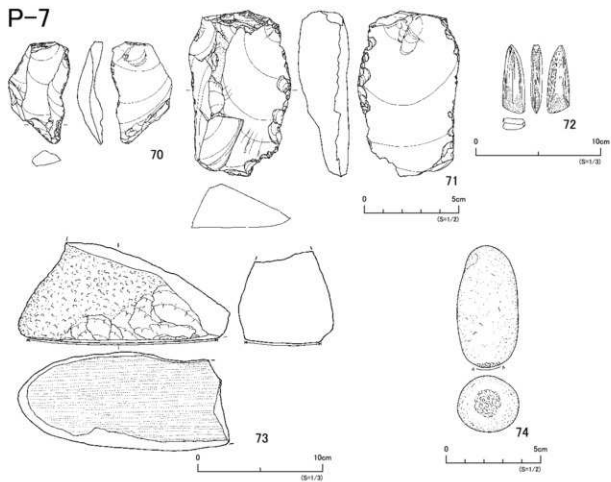


図V-42 土坑出土の石器等(1)

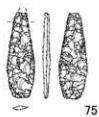


図V-43 土坑出土の石器等(2)

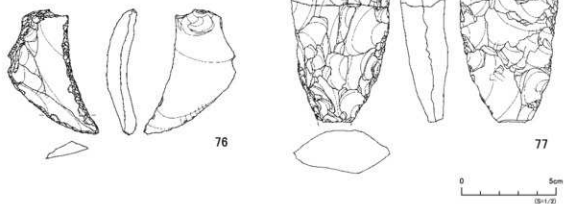
P-7



P-8

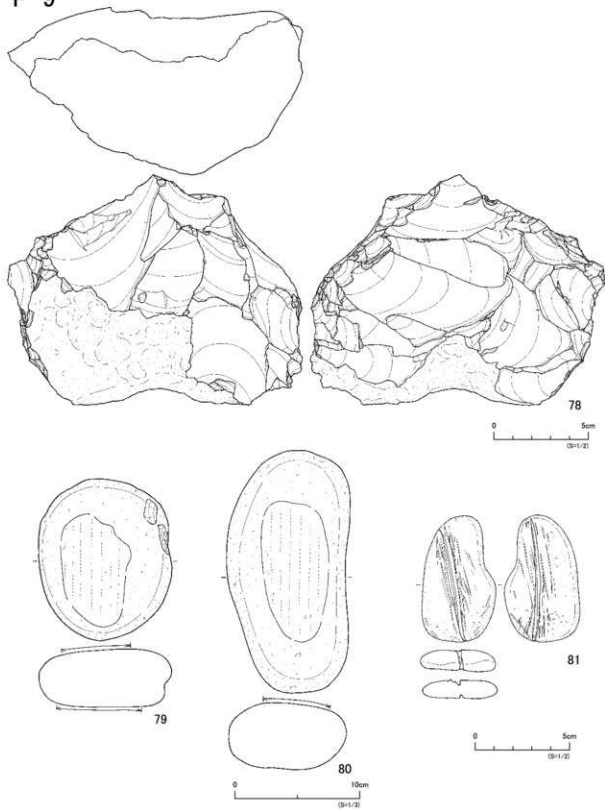


P-9



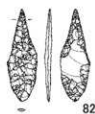
図V-44 土坑出土の石器等(3)

P-9

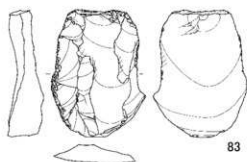


図V-45 土坑出土の石器等(4)

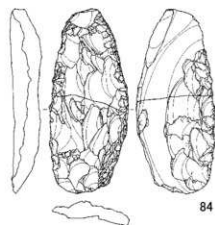
P-12



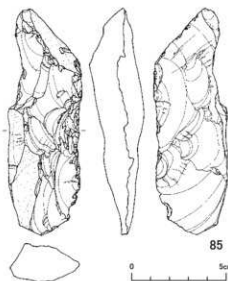
82



83



84



85



86



P-13

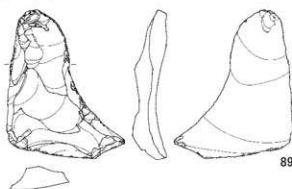


87



88

P-14

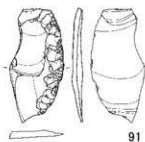


89

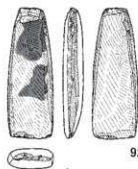
P-16



90



91

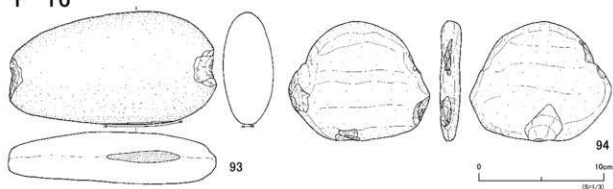


92

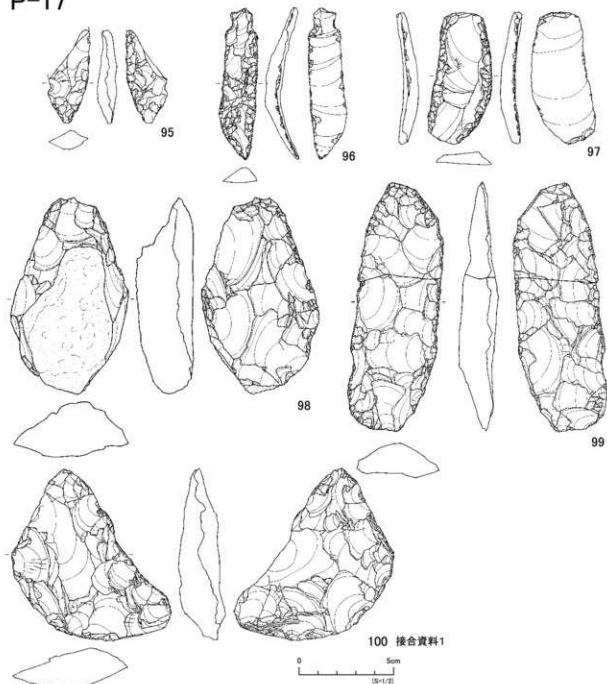


図V-46 土坑出土の石器等(5)

P-16



P-17



図V-47 土坑出土の石器等 (6)